

長野市立長野中学校 高等学校 改革

	長野市立長野中学校高等学校の現在の状況		
	(1) 総合学科としての学び		
	ア 中学からの継続と段階的に深化する探究カリキュラム・理系的人材の育成 中高一貫の利点を活かし、6年間で「自己理解」から「社会へのアクション」へと深化させる体系的な学びの構築		
	現状	【資料集 4】	課題
	「翼プロジェクト」において、1年次にワークショップを通じた自己・他者理解、2年次に地域と協働した課題探究を実践している。		今年度より新たに連携を図る地域・大学があるが、協力してほしい人材、その人数などの体制が確立途上である。
	中学校から高校への継続性を意識した探究プログラムの枠組みが存在している。		令和 7 年度まで三菱みらい教育財団より活動資金の助成があった。本年度からの活動の見直しを行っている。
	探究活動のために外部（地域・大学・企業）との連携を図っている。		
	イ 多様な教育課程の編成 「学びの選択」を尊重する総合学科の原点に立ち返りつつ、生徒の進路実現を力強くサポートする体制の構築		
	現状	【資料集 8】	課題
	人文、外国語、理数、社会学、芸術、スポーツ、生活、情報ビジネスの 8 系列の授業の選択が可能。多彩な科目が設定されている。		令和 6 年度から令和 8 年度まで、DXハイスクール事業の採択を受ける。3 D プリンターなどを購入し、生徒が使えるように授業を行う。理系分野の強化、科学的視点を持つ「深い探究」への進化を目指す。
	個々の進路に応じた「深い学び」や個別最適な学びを実現する指導体制の整備を進めている。		選択可能な多数の講座が開講できるが、教員の定数や施設の都合で開講できない講座がある。
	進学希望者は、普通科とほぼ同様の科目選択が行われている。		
	(2) 中高一貫教育について		
	ア 6 年間を見通した学習指導、教育課程 市立長野ならではの「中高の壁を越えた接続」を強化し、公立一貫校としてのメリットを最大化する指導体制を構築		
	現状	【資料集 6, 7】	課題
	県内で唯一の市立中高一貫校として、中学校からの継続的な学びの土台はあるが、高校での総合学科の学びとの接続をさらに強化する段階にある。		高校の総合学科における「多彩な科目選択」と、中学校での基礎学習をどう効果的に繋げるか、特に理数教育や科学的視点の導入をどのように行っていくか。
	中学校から高校へ進学した際、6年間を一つのスパンとして捉えた一貫した学習指導体制を日々検証している。		教職員の異動がある中で、6年間の教育目標や指導方針を中高の全教職員が継続的に共有し続ける仕組みが必要
	探究学習（翼プロジェクト）などの教育活動で中高の連携が図られている。		
	イ 中学 3 年時から高校の英語、数学の内容導入 一貫校の最大のメリットである「先取り」と「時間の有効活用」により、大学進学や高度な探究に対応できる学力を養成		
	現状	【資料集 4】	課題
	併設型一貫校として中学・高校が連携しているが、現時点では中学3年時の学習内容を高校段階へシフトさせる（先取り教育の）徹底には至っていない。		高校入学生（高入生）との合流時期における進度差の調整が難しい。一貫生の「時間的余裕」を学力の深化に十分繋げたい。
	中学校では「主体的・対話的で深い学び」の実装を目指し、指導に取り組んでいる。		大学受験対策や高度な自由研究・探究活動に注力できる「ゆとり」の創出
	英語・数学において、中学・高校の教員間での指導内容の共有を図っている。		
	ウ 英語教育、国際交流の充実 市立高校としての独自性を発揮し、語学力のみならず、異文化を理解し発信する力を備えた「グローバルな資質」の育成		
	現状	【資料集 5】	課題
	総合学科の特性を活かし、英語に関わる選択科目の設定や、基礎的な語学教育が行われている。		「市立」ならではの海外姉妹都市等との連携や、ICTを活用した日常的な国際交流の機会をカリキュラム化。
	長野市との姉妹都市クリアウォーターから短期の留学生受け入れや本校生徒の短期留学を行っている。		ICTやオンラインでの海外連携を日常化し、長野にしながら世界と繋がる学習環境の整備が必要。
	中学でのイングリッシュキャンプなど英語を主体にした行事が、高校での国際交流の基礎となっている。		

	(3) 部活動について 市立長野が「選ばれる学校」であり続けるために、部活動の強化と環境整備の充実		
	ア 全国大会出場常連校となるためには 特定の強化指定種目だけでなく、学校全体の士気を高めるための戦略的な強化		
	現状 サッカー部やスピードスケート部、陸上部をはじめとする部活動において、県内上位や全国を狙える人材がいる。 部活動の活発さが、中学生に対する「魅力ある学校づくり」の大きな一助となっている。 部活を頑張る生徒の中から、学力の向上を図り、大学入試を一般入試で突破を図る生徒が増えている。	【資料集 9】	課題 私立高校が授業料無償化などを背景に、スポーツ特待生等の確保で攻勢を強めており、人材確保の面で競合が激化している。
	イ 指導者 外部リソースの活用と、教員の働き方改革を両立させる持続可能な指導体制の構築		
	現状 教職員の異動がある中で、専門的な指導スキルを持つ教員の存在によって部活動の質が保たれている。 多くの部活動に部活動の指導者のつながりで、外部コーチやメディカルスタッフが存在している。	【資料集 9】	課題 教員の働き方改革が進む中、放課後や休日の部活動指導を教員のみで担うことに限界はある。 外部の高度な専門指導者（コーチ）を積極的に活用できる体制の構築。
	ウ 施設 市立高校としての強みを活かし、私立に負けない練習環境の整備・活用		
	現状 運動場や体育館などの設備が、私立高校等と比較すると近年の高度化する競技ニーズへの対応に差が出始めているが、それでも市立長野高校を選択する生徒は多い。	【資料集 9】	課題 活動環境を整備することが、生徒募集上の課題の一つ。
	市立長野の魅力化		
	ア 少子化の波 市立長野中学・高校を取り巻く状況		
	現状 中学入学予定者は今後10年で約600人減少（旧第3通学区）し、高校入学予定者も北信地区で約1,300人減少する厳しい少子化傾向にある。 令和8年度の倍率は中学1.91倍、高校前期1.66倍と一定の人気を保っているが、高校後期は1.07倍と、県立上位校や私立への流出が見られる。5年間で2回後期選抜の倍率が1.0倍を割り込む。 市立長野に入りたい生徒は多い。しかし、後期選抜で不合格になる不安感から出願を避ける傾向がある。	【資料集 1， 2】	課題 志願倍率が下がると、学力層の幅が広がりすぎ、教育活動の焦点がぼやける懸念がある。 少子化に対応した適切な学校規模の在り方
	イ 自らの夢を見つけ、挑戦し続ける生徒の獲得 「探究心」と「主体性」をキーワードに、質の高いマッチングの実現がのぞまれる。		
	現状 「翼プロジェクト」を行うことで「探究心」と「主体性」を持った生徒の育成に取り組んでいる。自分の興味あることを探究学習できるような、指導体制がある。 中高一貫教育を活かした「6年間の探究カリキュラム」を最大の武器とし、大学進学にも直結する「深い学び」の場づくりに取り組む。 中高一貫生と高校からの入学生が混在するクラス編成をし、多様な学びを求める生徒のニーズや個性の尊重という教育改革の方向に取り組んでいる。 進学希望の生徒が多いため、進学に即したカリキュラム編成を希望する生徒が多い。 ICTを使った授業の充実、環境整備に取り組む。 「市立長野高校で学びたい」「市立長野高校で部活を頑張りたい」という生徒の気持ちに応える教員の体制の構築を続けている。	【資料集 2， 3】	課題 「自分の個性や興味で学びを選べる」という総合学科の本来の魅力が、単なる「普通科に近い進学校」として受け取られている側面がある。 ICT教育環境や施設設備の更なる充実。 中高一貫教育を活かした「6年間の探究カリキュラム」と高校からの入学生が混在する学校が本校の最大の良さとして考えられる環境づくり。